

# リベルテール

7 月 号



和田久太郎



吉田大次郎

Libertaire VoL, V, No 8

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可  
昭和四十九年七月十五日発行第五十五号

定価一〇〇円(送料共)リベルテールの会

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

1974年7月15日発行 VoL, V, No 8

編集兼発行者 三浦精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)

目次

反対選挙・反対権力	田中義人	P1
近況雑感	横倉辰次	P2
渡辺政太郎夫妻の遺骨	望月百合子	P5
備忘録より	杉藤二郎	P5
カー「バクーニン」論	マックス・ネットロー	P6
野火		P15
国家覚え書	三浦精一	P16

反対選挙・反対権力

田中義人

毎年どこかでなにかしらの選挙が行なわれている。そして毎度毎度、棄権防止のキャンペーンが行なわれる。その理由として、棄権は自分の首をしめるだけだ、政治に無関心であってはならない、皆が参加して住みよい国を、などという。

僕は選挙には反対ではないのだ。多数の人々の参加による選抜の方法として、選抜をしなければならぬのなら、どうして選挙というような方法以外の方法があるだろうか。

だけでも、僕は「反対選挙」をさげふ。僕はなぜ反対選挙なのだろうか。それは今の選挙が個人から権力を取り上げ、その取り上げた権力によって、今度は反対に個人を支配しようとするからなのだ。

一体、国会議員にしろ代議員にしろ、いつ個人を支配することができ権力を個人から取ったのか。選挙という、「人の民主的思想の発展の中で」民主的言語のよう誤解された言葉のどこに、個人が選ばれたものに権力を与える、などという意義があるだろうか。権力の移譲を伴わない選挙、単なる多人数の人々の意志の発現機

会としての選挙なら、どうして僕に選挙を反対する理由があるだろうか。選挙が、「人類の生存の形態の一つの発現である」自我を無視して支配の方法として今、用いられているから、僕は反対選挙を言うのだ。

どのような集団にあっても、権力という強制によって事柄を運ぼうとするものは、人類の未来への発展が意志によってなされる以上、頽廃以外のなにものでもないのだ。

なぜ政治の領域において、権力の強制を予知した選挙に僕は参加しなければならないのか。僕は誰にも権力を移譲するつもりはない。この僕にどうして棄権は悪いことだと、反論することができるのか。

政治は今から半世紀ほっちしか前でない戦前に、僕達に「語りたいたいことを語らせず」「見たいものを見せもせず」正しいと思う個人の思惟に立却する行為を犯罪としてきたのだ。どうして、このような誤ちをくり返すため、今僕は選挙に参加しなければならないのか。

そうして今も、政治は僕達に「語りたいたいことを語らせず」「見たいものを見せない」ことがあるのだ。一体、いつ治安維持法のごときものが再び現われぬ、と選挙は保証してくれるか。白々しい候補者の言葉の中にしか、そんな言葉はないのだ。

「ながれ」という小冊が送られてきた。無政府共産党事件に対する批判が載っている。主として白井新平の意見が主で、悪罵と嘲笑が、アナキズム運動でないというのだ。これは一応、首肯できる意見だが、その座談会の出席者の紹介の処の小生に就て飛でもないまちがいがあるので一言したい。

(横倉辰次、あの頃、黒連、A O労働者連盟に参加：)とある、これは飛んでもない誤りだ。

黒連とA O労働者連盟は、期的にはズレているが、やや同時期に存在していたが、両者は水と油、白と黒程に違ったものである。これを両方に参加していたなんて、飛んでもないデマであり誹謗にさえとれる。白井君は悪意で書いたのではなく、無智ゆえであろうが、黒連の不良少年的跳ね返えりと運動には何の役目を果せないのを嘆いて、武良二氏が村上義博氏と協議してA O労働者連盟を創立したのだ。これに対して前田淳一が、分派行動であり、利敵行為だと武良二氏を黒連の事務所と呼んで殴打事件さえ起きた。

A O労働者連盟は、黒連がなぐり込んで来たら迎撃し

ようと手ぐすね引いて待機した事さえあったのだ。黒連とA O労働者連盟とは、所謂の犬猿の仲で対立していた時代があったのだ。

黒連は略屋の集りと見なしていたし、A Oの方は大半が自由労働者であったから。その後、黒連の中からA Oと仲の良い者がいて、(菊岡久利・当時の高樹寿之介、上田章)仲介の労をとって、険悪な空気が薄らぎ、黒連の略屋共は、生活の不安からA O労働者連盟(黒色自由労働者組合)に接近し、その顔で動くようになったのだ。略屋をしながら今日というアルバイト的に。こんな彼等ゆえ、アナルコ・サンジカルの運動は皆無で、無謀な行為が多く、そのために魚藍乱斗事件が起きたり、自由労働者が登録制になったのだ。

これらに就ては中断されてる小生の「思い出の記」を再稿せねばならぬと思っている。

白井新平君は、今、プライベート印刷物を出しているが、その文中に大沢正道、秋山清、小松隆二も含めて、非常に反感を持ち、悪意に満ちた批判、言辭を弄しているが、小生から云えばニガニガしき限りだ。

現在とはともかく、大沢・秋山両氏は数十年間、アナキズム運動に献身していた実績がある、両氏の挺身で日本アナキズムは存在保持されていたのだ。

大沢氏の「黒の手帳」がアナキズム的でないとしても日本文化に貢献するものだ。白井君の出版してるプライベートの印刷物は自己弁護オンリーだ。ブルジョア趣味的にだすのではなく、又、自連と自協に対しても、今更自協の方が如何に正しかったかと誇示する事も慎んだ方が良さ。

自連と自協の喧嘩は、お互にその非をさとって和解したのだし、敗戦後のアナキズム運動は双方の者が、それに就て何も言わず協力してきたのだ。今更、何も言う必要はあるまじ。

## 渡辺政太郎夫妻の遺骨

望月百合子

私達の大先輩渡辺政太郎が亡くなってもう五十数年。この夫妻もともと庶民の出で、その澄んだ魂と心で、世の構成の不正不義を感じとり、人間の生き方とはこんなもの善はない。人間とは自由で愛情にあふれ、助け合っただけの生き方をするものだ。そう思った心が日本初期の社会主義の思想に吸い寄せられて行った。

ひと度この思想を知るや夫妻は傍目もふらずこの思想の実現に向って突進した。身につけた貧しい文学を駆使して「微光」を発刊して一人でも多くの同志を念願し

た。一挺のバリカンを手に裏町から裏町へ一銭床屋として廻り歩き、その一銭すら取らずに子供等の頭を刈りながら母親たちに、何故このように貧しい暮らししかできないか、その仕組みを説きあかし、凡ての人間が平等に働らき平等に楽しむ、あるべき人間の世界について話しつつけた。

こうした日常で殆んど収入のない彼を扶けたのは妻の八代であった。八代は仕立ものを引受けては暮らしを立てた。

堺利彦や荒畑寒村が権力を認める思想に転じた時も政太郎は、誰かが権力を持つ社会はたとえ社会主義であっても決して人間の生活をよくするものでないと信じ、その人々と袂を分った。どんな形にしろ権力を認める社会は只の変革であって自由で平等の新社会にはなり得ぬたとを彼はよく知っていた。

彼の狭い間借りの部屋も、後に移った裏長屋も若い同志でいつも賑やかだった。毎週の研究会には狭い家に入り切れず窓枠に腰かけたり外に立つ者さえもいたということだ。二銭の会費でせんべいや豆を買いお茶を飲んで談論風発、意気軒昂だった。そして帰りの電車賃のない者には政太郎は電車賃を渡し、腹を空かしている者には飯を食べさせた。

大正七年彼は宿痾の胸の病に無理が祟って四十六才で死んだ。彼を火葬場へ送る行進がそのまゝ彼の葬式で、座棺の前に望月桂が即席で描いた似顔絵を掲げ、同志の青年達が代る代る架ぎ、両側を護り、後につづき高らかに革命歌を合唱しながら白山から町屋の火葬場まで行進した。むろん沿道の人々が驚ろき道に飛び出して見送る光景であった。そして骨上げをした。ここまでは分っていたが、私が気づいた時はもうその遺骨がどこに埋められたか知る人々が居なくなっていた。

八代末亡人は昭和になつてから私の家にもよく泊りかけて遊びに来て病気がちの私の面倒をよくみてくれた。その八代夫人が広尾病院で亡くなったと知らされてかけつけたが、八代夫人は仄暗い霊安室の入口にまだ運び車にのせられたまゝぼつんと置かれたまゝ、しかも絆てんをかけられた遺骸の信じられぬほどの小さく私は仰天した。もともと小柄な人ではあつたけれど死とはこんなにも人を小さく縮こめてしまうものかと胸がじんとして私はそこらうずくまつてしまつた。

病院で手当を受けて帰宅したが私はそれきり葬式がどうなつたかも知らずに過ぎた。

近年になつて宮下太吉の墓もできだし、金子ふみ子の墓も先祖の墓地に建てられたし、政太郎夫妻の墓はどう

なっているかと、先輩にきいて廻つたが誰も知らない。

大杉や幸徳のように書物も残さず、異常な事件にもまきこまれぬ生涯のため、その名すら知らぬ者が多いのがかにも残念。殊に甲府には解放戦線で活躍した物故者の慰霊碑が盆地をみはるかす愛宕山山にもう十数年前に建てられていて、太吉もふみ子も合祀されているのに渡辺夫妻は全然忘れられている、というより誰もその名すら知らない。私はせめてこの碑に渡辺夫妻の名を刻んでほしいと思つた。そして四年目、やっと渡辺政太郎の業績が理解されて今年四月二十四日に合祀された。しかし解放戦線の人々でも女性の内助を軽くみるのか八代夫人の名は刻まれなかつた。

その後、渡辺夫妻の遺骨は延島家の墓石の下にあることが分つた。さっそくその寺同栄寺に行つてみると寺の奥さんが、

「寺ではそんなこと一切知りませんが、そういえば英一さんを埋葬するとき息子さんが骨壺が二つ多いが誰のだろう、といつてましたから、それではその人達のでしよ」という。私にこの遺骨のことを話してくれたのは延島英一の妹の節子で、

「小父さんの時はみんな承知だったのに、小母さんの時はうちには無断で入れられたのよ」ということだった。

同志の墓とは云え死んでからまで居候とは云いようもなく悲しい。骨なんか粉にして吹つとばせという考え方もあるけれどやはり痛ましい。甲府の慰霊碑への合祀の際には私が遺族代表ということで列席したが本当の血縁の遺族を探し出して、生れた村の先祖の墓地の片すみに遺骨を移して小さな石でも置いて上げたい。あの美しい魂の二人の大先輩をそうして後からくる人々に知らせたい。

## 備忘録より

杉藤 二郎

一九四九年、松本治一郎の追放解除を祝う会が、福岡市の東公園で行われた。

その演壇に、副島辰巳を引上げ、一席演説口調で反選挙の意義を、しゃべらせた。何しろこの会合は、解放部落の意気盛んなことを世間に訴える、言わば同和運動の一端であり、他所者をよせつけないのが当然であつたが黒旗を先頭に数人の荒くれ男が、しゃにむに演壇を占拠した為、彼等はあつげにとられていた。

副島が何をしゃべつたか、聴衆に聞こえる訳がない。ただ会場を黒旗によつて沸かせたにすぎないが、その一瞬の出来事が、我々に大いに役立ち、その後学生などの集まりもよくなつた。

松本治一郎氏は、天皇も人間であると、天皇の前で愛用のステッキをつき、物議をかもしたが、後日代議士になつた時、天皇より宮中でも使用できるステッキ（杖）を下附されたことのある人である。若い時からの同和運動（部落解放）の闘士であつた。

### 赤川啓来君の死

六月の初旬、赤川啓来君が死んだと聞いた。山鹿君たちと日本の労働運動で活躍したことは、山鹿君がそのたそがれ日記に書いている。あの軍国主義の酷しい時代に脱營して上海に逃げた話は有名だ。こうして一人また一人と勇敢だつた同志が世を去つてゆく。(M)

X

リベルテール サロン

毎週火曜午后6時から水道橋駅近くの終着駅で開いている。自由に参加して自由に駄弁る会である。

◎7月30日（火）は喫茶店が休むので休会。